



2025 冬 vol.151

特集

# 『琵琶湖の魚類図鑑』の ここがすごい！

私の出版体験

『有明の月 ガラシャの双刀』  
戦国ラノベをイベント&ネットの二刀流で販売

INFORMATION STATION 催し案内 2025 冬

MYBOOK 自費出版物の紹介

SUNRISE BOOK PRESS サンライズ出版の新刊案内

特集

滋賀県立琵琶湖博物館のトンネル水槽にて。左から編者の川瀬さん、藤岡さん、田畠さん

# 『琵琶湖の魚類図鑑』の ここがすごい！



昨年(2024)8月に刊行された『琵琶湖の魚類図鑑』は、琵琶湖と滋賀県内の河川にすむ魚類85種と主な貝類・甲殻類各10種を解説した、淡水魚ファン待望の本格的図鑑として好評を博しています。

第1章「魚たちのすむ琵琶湖」で琵琶湖の400万年にわたる歴史を概説し、第4章「琵琶湖の漁と食文化」で魚を獲る漁や伝統食についても紹介、本書のオビには「琵琶湖の成り立ちから漁法・食文化まで、この一冊で琵琶湖の魚のすべてがわかる」と謳われています。

編集にたずさわったお三方に、本書の読みどころ、見どころをうかがいました。

書店にて好評発売中  
**『琵琶湖の魚類図鑑』**

藤岡康弘・川瀬成吾・田畠諒一 編  
B5判・総232頁 サンライズ出版  
定価4400円(税込)



# 一つの地域でコンパクトにいろいろな物語が成立している点が、琵琶湖の特徴だと思います。

## 27年越しに「三度目の正直」で完成

— 藤岡さんは、かなり以前から琵琶湖の魚の図鑑をつくるうと考えておられたそうですね。

藤岡 琵琶湖の魚を紹介した本としては、大津市打出浜の滋賀県立琵琶湖文化館に水族展示があつた時代の昭和55年（—1980）です。

田畠 滋賀県立琵琶湖博物館  
主任学芸員  
**田畠諒一さん**  
たばた・りょういち／1986年  
神奈川県生まれ。専門は魚類学、進化生物学。

川瀬成吾 滋賀県立琵琶湖博物館  
主任学芸員  
**川瀬成吾さん**  
かわせ・せいご／1987年滋賀県生まれ。専門は魚類系統分類学、水族保全学。

藤岡 岡弘 滋賀県立琵琶湖博物館  
特別研究員  
**藤岡康弘さん**  
ふじおか・やすひろ／1954年  
滋賀県生まれ。元滋賀県水産試験場長・元滋賀県立琵琶湖博物館上席総括研究員。

ふじおか・やすひろ／1954年  
滋賀県生まれ。元滋賀県水産試験場長・元滋賀県立琵琶湖博物館上席総括研究員。

川瀬 僕たちが魚について調べようとした頃には、この本はもう絶版になっていました。図書館などで借りる本でした。

田畠 僕たちが魚について調べようとした頃には、この本はもう絶版になっていました。図書館などで借りる本でした。

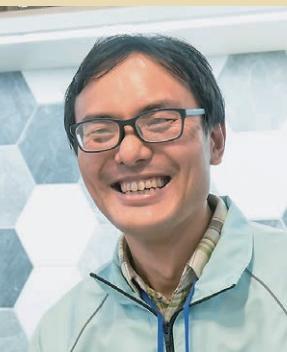
藤岡 そのぐらいお二人と私は世代が違うのですが、この本 자체が入手しづらくなり、内容もそれぞれの魚にまつわるエピソードを書いていた読み物的なものだったので、学術的な研究成果をまとめた図鑑が必要だと思っていました。

最初に思ったのは、琵琶湖博物館が開館した平成8年（—1996）年の翌年、平成9年ぐらいです。琵琶湖文化館から引き継ぎ、さらに大規模な水族展示となつて琵琶湖の魚への関心が非常に盛り上がりついていたので、水槽で泳ぐのを見るだけではなく、深く知つてもらうために必要だと感じたからです。残念ながら形にはなりませんでした。

田畠 僕は滋賀県出身で、琵琶湖の魚は小さいころから関わってきて、いまに至つているので、すごく光栄だと思いました。非常に忙しい時期でしたが、実現させたいなという気持ちは強かったです。

田畠 もちろん僕もですが、途中にはコロナ禍になつて県職員として保健所に交代で応援に行くような時期があつたり、令和5年（2023）2月に琵琶湖博物館のビワ

※1 『湖国びわ湖の魚たち』—1980年に初版（写真上）発行、—1986年に改定版発行、—1991に増補改訂版（写真下）発行。



滋賀県立琵琶湖博物館  
主任学芸員

**田畠諒一さん**

たばた・りょういち／1986年  
神奈川県生まれ。専門は魚類学、進化生物学。

滋賀県立琵琶湖博物館  
主任学芸員

**川瀬成吾さん**

かわせ・せいご／1987年滋賀県生まれ。専門は魚類系統分類学、水族保全学。

滋賀県立琵琶湖博物館  
特別研究員

**藤岡康弘さん**

ふじおか・やすひろ／1954年  
滋賀県生まれ。元滋賀県水産試験場長・元滋賀県立琵琶湖博物館上席総括研究員。

**コオオナマズ**の水槽が壊れるといった出来事もあり、果たして本当に完成させられたのかと不安になる時もありました。

川瀬さんが18種、田畠さんが7種の計35種を担当なさり、残り50種と貝類・甲殻類はそれぞれの研究者の皆さんで、他分野の方も合わせて30人ほどになっていますね。

**川瀬** 魚の分類群ごとや、滋賀県でその魚について熱心に研究・調査をなさっている人を中心 に依頼しました。

魚類学会会長の細谷和海さん（近畿大学名誉教授）のような大御所から若手研究者の方まで、皆さん、本当によく引き受けてくださいましたなと思います。

てください。助かりました。唯一、**ギンブナ**は、大学院の後輩で写真提供もしてくれて、三浦さん（九州大学助教）にお願いしたことになりますが、大学の異動などでのことから、このままでは間に合わない可能性があると判断して、お断りしてしまったのです。

藤岡 われわれ3人が、私は魚の生態、川瀬さんは魚の分類、田畠さんは遺伝子を用  
時期に重なつてしまい、僕が書いて三品さ  
んにも確認いただくかたちになりました。

いた種分化の研究と、それぞれが違う分野から見た琵琶湖の魚という視点で取り組めたのも、うまくいった要因かなと思つています。

——執筆にあたって苦労なさった点はありますか。

——写真でいうと、藤岡さんの2回目の計画にあたるご相談の時に、ビワマスの解説ページの見本組を作成しました。ビワマス

多くの魚の生態はまだ謎だらけ

以外の魚だと卵や稚魚の写真がない種も多  
いと言つても、驚かれて貰えます。

藤岡 研究者が多く、いくつも論文が出て

図鑑ではごく一部を除いて、解説執筆者がそろえました。県外にもいる魚についても、できるだけ滋賀産、琵琶湖産の魚の写真を

——特に貴重な写真などはありますか。

川瀬 芦笛文化館と琵琶湖博物館で撮りためている写真は、基本的には貴重な写真ばかりですね。学芸員だった松田尚一さん、前畠政善さん、秋山廣光さん、松田さんの息子の征也さんらが撮りためた写真があるので、本書の完成もその積み重ねがあるてこそという面があります。

アブラハガイの写真などは本当に貴重で

んど見つからないので。  
**田畠** この写真は琵琶湖文化館の時代に前畠さんが撮影なさったもので、最初に話の出た『湖南びわ湖の魚たち』の改定版（昭

和61年)へ、昭和57年(1982)に細谷さんによって新種記載されたアブラヒガイが追加で掲載された時に使われたのと同じ写真です。

**川瀬** あとは、手前味噌ですが、僕が担当したカマツカ類のページに掲載した朝鮮半島にすむ近縁種の写真も、日本の図鑑ではなかなか見られないものだと思います（右

下の写真参照)。セセラ属は日本にはセセラとヨドゼセラしかおらず、ムギツクも日本にはムギツク属の一種類しかいないので、すが、韓国にはわりと多くの近縁種がいる。

ので韓国の知り合いの研究者から提供していただきました。

いと言われて驚いたのを覚えていてます。

ヨドゼゼラの成魚（メス）  
写真：川瀬成吾



## ゼゼラ属と近縁なコブクロカマツカ属

魚はわからない部分も多いですね。琵琶湖  
固有種の魚でもそうです。  
かきおかりょう

筆なさつたこの図鑑の記述でいうと、沿岸域で水底に産卵すると考えられる」ので、十巴、「産卵が直接見えた」に列はまざむ

が確認は得られてしません。テヌモロニも「野外で産卵を観察した例はまだない」の  
で、「内湖や河口などの浅場で水底に産卵

ところで産むとされています。僕は釣りが好きなので、**デメモロコ**の産卵期に、岸辺か

ですから、たぶんこら辺で産んでいるんだろうなとわかるのですが、水深数mのと

**ホンモロコ**だったら、湖岸に生えている  
水草やヤナギの根っこが水中に露出してい

るところに寄ってきて、そこを見れば卵がついているので明らかなのですが。



1



2



3



4



5

① ホンモロコの成魚（メス）  
② ホンモロコの産卵  
③ 湖岸に産みつけられた卵  
④ ホンモロコの仔魚  
⑤ ホンモロコの稚魚

**藤岡** ホンモロコは非常にわかりやすい。

私が担当した解説では、産卵行動から卵、仔魚、稚魚まで自分で撮影してきた写真を掲載しました（左の写真参照）。

**田畠** 川を遡上して産卵する魚の場合でも、

ハスなどはオスとメスがやってきて行う産卵行動がよくわかるのですが、やはりわりににくい魚もあります。もしかしたら、普通に泳いでいるふうに見えながらパッと産んでいるだけかもしれないのですが。

たぶん一年に一回しか卵を産まない日本の淡水魚の場合は、産卵行動の研究がとてもリスキーなせいでもあると思います。スゴモロコなら春だけ、ハスなら夏だけなので、大学生4年生が卒論でスゴモロコの産卵を見ようと思つても、4月だつたらもうほぼ終わっています。

**川瀬** それと、人が行って観察しやすいところの種はよいですが、深いところで産卵したり成長する種は観察すること自体が難しいという面もあります。研究室でも学生を危ない場所へ行かせるのは避けますから。

**田畠** ただ、最近は水中ドローンや、定点観察のためのタイムラプスカメラなどもで

きてきているので、それを用いた研究も出てくるでしょうね。

——技術の進歩で、新たな発見もあるかも

しれない。

**田畠** じつは僕はそれをやりたいなどずっと思っているんです。これまで調査ができていなかつた琵琶湖の水深2m以深の場所

での魚の産卵行動などについて調査をしたのですが、忙しいのでなかなか時間がないうま、取り組めていません。

**藤岡** 魚に関する研究は、食用かそうでないかの差も大きいですね。水産業で漁獲されている魚は水産試験場や漁業関係者が生態を知りたいと思うので、研究は進んでいます。全体では食用とならない魚のほうが多いので、いまでも、かなりの魚に生態上で不明な点がたくさんあります。

**川瀬** 魚類学のベースは水産学からきいて、1960年代になって、ようやく水産業とは別に純粋な魚類学をやろうと言われ

※2 タイムラプスカメラ（数秒から数時間ごとに静止画を撮影し、短時間に縮めた動画を作成できるカメラ。長時間におよぶ実験や野外観察に利用される。）

始めました。日本魚類学会が設立されたのは昭和43年（1968）です。非商業種

の、水産事業者以外の研究が盛んになり始めたのは、それ以後となります。

1970年代は工業化による水質汚濁や河

川の大改修などが問題視され、開発対自然保護でバチバチやり合って研究どころじゃなかつた時期もあつたようです。

**藤岡** 研究対象には流行り廃りもあつて、琵琶湖の固有種を対象に、川那部浩哉さん（琵琶湖博物館初代館長）の世代がハスやゲンゴロウブナ、ホンモロコなどを熱心に研究なさって、論文も多く出た時期がありました。

それが、だいたい一巡すると、海外の古代湖であるマラワイ湖（アフリカ東部）などの研究に移つていて、琵琶湖の魚があまり研究対象にならなかつた時代が、わりと長くあつて、その時期はデータがほとんど蓄積されていません。

**川瀬** 1970年代から80年代にはそれぞれの魚の生態をくわしく記載する研究が多くなったのですが、最近は減つていまします。そうした研究があまり評価されないからなのか。

**田畠** 評価されないと、単純に大変だからやる研究者がいないのでは。

僕が担当したナマズ科の場合、前畠さんがビワコオオナマズについて記載され、イワトコナマズについては新種記載された。友田淑郎さんが生態や行動について記載なさっています。それでも、産卵については水深10mのところへダイバーが夜に潜って、岩の隙間にたくさんいるのを見つ

けたという段階にとどまっています。産まれた稚魚たちはどこに行つたのかとなると、まったくわかりません。生後一年でどれくらいの大きさになるかも飼育下であって、野外でのデータはありません。実際、謎ばかりです。

川瀬 かなり研究されているナマズ類でもそうなので、他の魚はあまりわかつていません。特にヌマムツの場合、昔の標本を見たら、必ず琵琶湖産としてヌマムツの標本が出てくるほどありふれた魚だったのに、現在、琵琶湖と内湖ではほとんど見られません。ただ、扇状地の水路などにはいるんじゃない

です。なぜ、琵琶湖と内湖で姿を消したのかは、正直よくわかりません。おそらく何か生態と関係しているのでしょうかが、ヌマムツの生態を専門にしている研究者はいないので、いまのところ原因不明です。

ワタカモ、国内外来種としている九州では増えているのに、なぜ琵琶湖では増えないのかが謎とされています。産卵期の水位上昇が要因と考えることもできそうですが、はっきりとはわかつていない状態です。

不明な生態が多いので、種によっては解説部分のスペースをどうやって埋めようと苦労なさっていた執筆者もおられました。

## 地学や気候学の成果と合わせて考える琵琶湖の魚の進化

——この図鑑を通して読んで、興味深かつた箇所というのはありますか。

藤岡 私としては、国松翔太さん（京都大学理学研究科博士課程）がお書きになつたコラム「ヨシノボリの交雑—琵琶湖水系は“種のるつぼ”か」がとても興味深かったです。ハゼ科で平成29年（2017）に新種記載されたビワヨシノボリと、同じく琵琶湖固有種であるオウミヨシノボリ、それから滋賀県では大戸川水系にだけいるシマヒレヨシノボリが、いろいろ交雑をしながら種分化をしてきた、交雑種は分布域に偏りがあるという内容で、そんなダイナミックな展開をしているのかと驚きました。これは、おそらく読者のほとんどが存じないことだと思います。

川瀬 やはり琵琶湖は近縁種の種分化の場であると同時に、近縁種どうしが交わる場であるという、両方の側面があつて、それが琵琶湖の魚種の複雑さ、多様性を高めているんだなというのを実感できる内容でした。そのヨシノボリ3種についてもです、

の解説でふれられているコウライモロコとの関係なども興味深かったです。

また、細谷先生に書いてもらつたビワヒガイも、長頭型のツラナガ、中間型のヒガイ、短頭型のトウマルと、昔から呼ばれてきた3種について、図入りで解説していただけたのもよかったです。それぞれの関係性や、トウマルとカワヒガイの関係などまだわからぬ点も多いのですが。

——一つの種とされているが、さまざま

タイプが見られる場合ですね。

川瀬 ヒガイ属は分岐が浅い種なので、遺伝的にも混ざりやすく、余計に本当の姿は見えにくくなっているような気がしますね。

田畠 僕自身はタニガフナマズの発見や新種記載にも関わらせてもらつていますが、

これが専門という魚はないんです。遺伝子分析による研究では、琵琶湖の魚はコイ科が多いので、コイ科に關しては一通りは

知っているつもりでいたのですが、改めて卵の大きさや生態について初めて知る知識

があった、勉強になりました。

が、一冊の中で読めるというのはすごいなと思います。

藤岡 ありがとうございます。この図鑑の構成上の最大の売りはここです。田畠さん担当部分の最後に掲載された図（7ページ上に転載）で、古琵琶湖の変遷と、どの古

琵琶湖の時代にどの種が分化したかを見て、いろいろ考えてもらえたと思います。

タネを明かしますと、図鑑の第一章の構成をこのようにしようと思ったのは、雑談からなんですよ。僕は現役の研究員だった頃、昼ご飯を地学の研究室で食べていて

いたことが、図鑑に入れようと思ったきっかけです。

田畠 これまでに琵琶湖の固有種、

例えばポンモロコ、イサザ、ビワマス、ア

ブライガイ、イワトコナマズなどは、すべ

て現在の琵琶湖に適応したかたちをしてい

るので、現在の琵琶湖の大部分にあたる北

湖が形成された40万年前以降に、その環境へ適応して新しい種になつたのだろうと考

えられていました。

ちのすむ琵琶湖です。琵琶湖博物館学芸員の里口保文さんの「琵琶湖の成り立ち」、同じく林章馬さんの「琵琶湖地域の気候の変化」、藤岡さんの「琵琶湖水系のさまざまな環境」、川瀬さんの「琵琶湖水系の魚類の分類」、そして僕自身が書いた「琵

琶湖産魚類の起源とその分布の特徴」と5節あるのですが、これらは全部がつながつていてるともいえます。

僕は進化や種分化について研究しているので、論文を書くために必要ですし、琵琶湖博物館で一緒に仕事をしているので知識があつたのですが、魚だけやっていて書かれた図鑑だと載らない情報だと思います。それ

が、一冊の中で読めるというのはすごいな

と思います。

藤岡 ありがとうございます。この図鑑の構成上の最大の売りはここです。田畠さん担当部分の最後に掲載された図（7ページ上に転載）で、古琵琶湖の変遷と、どの古

琵琶湖の時代にどの種が分化したかを見て、いろいろ考えてもらえたと思います。

タネを明かしますと、図鑑の第一章の構成をこのようにしようと思ったのは、雑談からなんですよ。僕は現役の研究員だった頃、昼ご飯を地学の研究室で食べていていたことが、図鑑に入れようと思ったきっかけです。

田畠 これまでに琵琶湖の固有種、

例えばポンモロコ、イサザ、ビワマス、ア

ブライガイ、イワトコナマズなどは、すべ

て現在の琵琶湖に適応したかたちをしてい

るので、現在の琵琶湖の大部分にあたる北

湖が形成された40万年前以降に、その環境へ適応して新しい種になつたのだろうと考

えられていました。

ちのすむ琵琶湖です。琵琶湖博物館学芸員の里口保文さんの「琵琶湖の成り立ち」、同じく林章馬さんの「琵琶湖地域の気候の変化」、藤岡さんの「琵琶湖水系のさまざまな環境」、川瀬さんの「琵琶湖水系の魚類の分類」、そして僕自身が書いた「琵

琶湖産魚類の起源とその分布の特徴」と5節あるのですが、これらは全部がつながつていてるともいえます。

僕は進化や種分化について研究しているので、論文を書くために必要ですし、琵琶

湖博物館で一緒に仕事をしているので知識があつたのですが、魚だけやっていて書かれた図鑑だと載らない情報だと思います。それ

が、一冊の中で読めるというのはすごいな

と思います。

藤岡 ありがとうございます。この図鑑の構成上の最大の売りはここです。田畠さん

担当部分の最後に掲載された図（7ページ上に転載）で、古琵琶湖の変遷と、どの古

琵琶湖の時代にどの種が分化したかを見て、いろいろ考えてもらえたと思います。

タネを明かしますと、図鑑の第一章の構成をこのようにしようと思ったのは、雑談

からなんですよ。僕は現役の研究員だった頃、昼ご飯を地学の研究室で食べていていた

のです。そこで、林さんたちの研究内容を聞いていたことが、図鑑に入れようと思った

きっかけです。

田畠 これまでに琵琶湖の固有種、

例えばポンモロコ、イサザ、ビワマス、ア

ブライガイ、イワトコナマズなどは、すべ

て現在の琵琶湖に適応したかたちをしてい

るので、現在の琵琶湖の大部分にあたる北

湖が形成された40万年前以降に、その環境へ適応して新しい種になつたのだろうと考

えられていました。

ちのすむ琵琶湖です。琵琶湖博物館学芸員の里口保文さんの「琵琶湖の成り立ち」、同じく林章馬さんの「琵琶湖地域の気候の変化」、藤岡さんの「琵琶湖水系のさまざまな環境」、川瀬さんの「琵琶湖水系の魚類の分類」、そして僕自身が書いた「琵

琶湖産魚類の起源とその分布の特徴」と5節あるのですが、これらは全部がつながつていてるともいえます。

僕は進化や種分化について研究しているので、論文を書くために必要ですし、琵琶

湖博物館で一緒に仕事をしているので知識があつたのですが、魚だけやっていて書かれた図鑑だと載らない情報だと思います。それ

が、一冊の中で読めるというのはすごいな

と思います。

藤岡 ありがとうございます。この図鑑の構成上の最大の売りはここです。田畠さん

担当部分の最後に掲載された図（7ページ上に転載）で、古琵琶湖の変遷と、どの古

琵琶湖の時代にどの種が分化したかを見て、いろいろ考えてもらえたと思います。

タネを明かしますと、図鑑の第一章の構成をこのようにしようと思ったのは、雑談

からなんですよ。僕は現役の研究員だった頃、昼ご飯を地学の研究室で食べていていた

のです。そこで、林さんたちの研究内容を聞いていたことが、図鑑に入れようと思った

きっかけです。

田畠 これまでに琵琶湖の固有種、

例えばポンモロコ、イサザ、ビワマス、ア

ブライガイ、イワトコナマズなどは、すべ

て現在の琵琶湖に適応したかたちをしてい

るので、現在の琵琶湖の大部分にあたる北

湖が形成された40万年前以降に、その環境へ適応して新しい種になつたのだろうと考

えられていました。

ちのすむ琵琶湖です。琵琶湖博物館学芸員の里口保文さんの「琵琶湖の成り立ち」、同じく林章馬さんの「琵琶湖地域の気候の変化」、藤岡さんの「琵琶湖水系のさまざまな環境」、川瀬さんの「琵琶湖水系の魚類の分類」、そして僕自身が書いた「琵

琶湖産魚類の起源とその分布の特徴」と5節あるのですが、これらは全部がつながつていてるともいえます。

僕は進化や種分化について研究しているので、論文を書くために必要ですし、琵琶

湖博物館で一緒に仕事をしているので知識があつたのですが、魚だけやっていて書かれた図鑑だと載らない情報だと思います。それ

が、一冊の中で読めるというのはすごいな

と思います。

藤岡 ありがとうございます。この図鑑の構成上の最大の売りはここです。田畠さん

担当部分の最後に掲載された図（7ページ上に転載）で、古琵琶湖の変遷と、どの古

琵琶湖の時代にどの種が分化したかを見て、いろいろ考えてもらえたと思います。

タネを明かしますと、図鑑の第一章の構成をこのようにしようと思ったのは、雑談

からなんですよ。僕は現役の研究員だった頃、昼ご飯を地学の研究室で食べていていた

のです。そこで、林さんたちの研究内容を聞いていたことが、図鑑に入れようと思った

きっかけです。

田畠 これまでに琵琶湖の固有種、

例えばポンモロコ、イサザ、ビワマス、ア

ブライガイ、イワトコナマズなどは、すべ

て現在の琵琶湖に適応したかたちをしてい

るので、現在の琵琶湖の大部分にあたる北

湖が形成された40万年前以降に、その環境へ適応して新しい種になつたのだろうと考

えられていました。

ちのすむ琵琶湖です。琵琶湖博物館学芸員の里口保文さんの「琵琶湖の成り立ち」、同じく林章馬さんの「琵琶湖地域の気候の変化」、藤岡さんの「琵琶湖水系のさまざまな環境」、川瀬さんの「琵琶湖水系の魚類の分類」、そして僕自身が書いた「琵

琶湖産魚類の起源とその分布の特徴」と5節あるのですが、これらは全部がつながつていてるともいえます。

僕は進化や種分化について研究しているので、論文を書くために必要ですし、琵琶

湖博物館で一緒に仕事をしているので知識があつたのですが、魚だけやっていて書かれた図鑑だと載らない情報だと思います。それ

が、一冊の中で読めるというのはすごいな

と思います。

藤岡 ありがとうございます。この図鑑の構成上の最大の売りはここです。田畠さん

担当部分の最後に掲載された図（7ページ上に転載）で、古琵琶湖の変遷と、どの古

琵琶湖の時代にどの種が分化したかを見て、いろいろ考えてもらえたと思います。

タネを明かしますと、図鑑の第一章の構成をこのようにしようと思ったのは、雑談

からなんですよ。僕は現役の研究員だった頃、昼ご飯を地学の研究室で食べていていた

のです。そこで、林さんたちの研究内容を聞いていたことが、図鑑に入れようと思った

きっかけです。

田畠 これまでに琵琶湖の固有種、

例えばポンモロコ、イサザ、ビワマス、ア

ブライガイ、イワトコナマズなどは、すべ

て現在の琵琶湖に適応したかたちをしてい

るので、現在の琵琶湖の大部分にあたる北

湖が形成された40万年前以降に、その環境へ適応して新しい種になつたのだろうと考

えられていました。

ちのすむ琵琶湖です。琵琶湖博物館学芸員の里口保文さんの「琵琶湖の成り立ち」、同じく林章馬さんの「琵琶湖地域の気候の変化」、藤岡さんの「琵琶湖水系のさまざまな環境」、川瀬さんの「琵琶湖水系の魚類の分類」、そして僕自身が書いた「琵

琶湖産魚類の起源とその分布の特徴」と5節あるのですが、これらは全部がつながつていてるともいえます。

僕は進化や種分化について研究しているので、論文を書くために必要ですし、琵琶

湖博物館で一緒に仕事をしているので知識があつたのですが、魚だけやっていて書かれた図鑑だと載らない情報だと思います。それ

が、一冊の中で読めるというのはすごいな

と思います。

藤岡 ありがとうございます。この図鑑の構成上の最大の売りはここです。田畠さん

担当部分の最後に掲載された図（7ページ上に転載）で、古琵琶湖の変遷と、どの古

琵琶湖の時代にどの種が分化したかを見て、いろいろ考えてもらえたと思います。

タネを明かしますと、図鑑の第一章の構成をこのようにしようと思ったのは、雑談

からなんですよ。僕は現役の研究員だった頃、昼ご飯を地学の研究室で食べていていた

のです。そこで、林さんたちの研究内容を聞いていたことが、図鑑に入れようと思った

きっかけです。

田畠 これまでに琵琶湖の固有種、

例えばポンモロコ、イサザ、ビワマス、ア

ブライガイ、イワトコナマズなどは、すべ

て現在の琵琶湖に適応したかたちをしてい

るので、現在の琵琶湖の大部分にあたる北

湖が形成された40万年前以降に、その環境へ適応して新しい種になつたのだろうと考

えられていました。

ちのすむ琵琶湖です。琵琶湖博物館学芸員の里口保文さんの「琵琶湖の成り立ち」、同じく林章馬さんの「琵琶湖地域の気候の変化」、藤岡さんの「琵琶湖水系のさまざまな環境」、川瀬さんの「琵琶湖水系の魚類の分類」、そして僕自身が書いた「琵

琶湖産魚類の起源とその分布の特徴」と5節あるのですが、これらは全部がつながつていてるともいえます。

僕は進化や種分化について研究しているので、論文を書くために必要ですし、琵琶

湖博物館で一緒に仕事をしているので知識があつたのですが、魚だけやっていて書かれた図鑑だと載らない情報だと思います。それ

が、一冊の中で読めるというのはすごいな

と思います。

藤岡 ありがとうございます。この図鑑の構成上の最大の売りはここです。田畠さん

担当部分の最後に掲載された図（7ページ上に転載）で、古琵琶湖の変遷と、どの古

琵琶湖の時代にどの種が分化したかを見て、いろいろ考えてもらえたと思います。

タネを明かしますと、図鑑の第一章の構成をこのようにしようと思ったのは、雑談

からなんですよ。僕は現役の研究員だった頃、昼ご飯を地学の研究室で食べていていた

のです。そこで、林さんたちの研究内容を聞いていたことが、図鑑に入れようと思った

きっかけです。

田畠 これまでに琵琶湖の固有種、

例えばポンモロコ、イサザ、ビワマス、ア

ブライガイ、イワトコナマズなどは、すべ

て現在の琵琶湖に適応したかたちをしてい

るので、現在の琵琶湖の大部分にあたる北

湖が形成された40万年前以降に、その環境へ適応して新しい種になつたのだろうと考

えられていました。

ちのすむ琵琶湖です。琵琶湖博物館学芸員の里口保文さんの「琵琶湖の成り立ち」、同じく林章馬さんの「琵琶湖地域の気候の変化」、藤岡さんの「琵琶湖水系のさまざまな環境」、川瀬さんの「琵琶湖水系の魚類の分類」、そして僕自身が書いた「琵

琶湖産魚類の起源とその分布の特徴」と5節あるのですが、これらは全部がつながつていてるともいえます。

僕は進化や種分化について研究しているので、論文を書くために必要ですし、琵琶

湖博物館で一緒に仕事をしているので知識があつたのですが、魚だけやっていて書かれた図鑑だと載らない情報だと思います。それ

が、一冊の中で読めるというのはすごいな

と思います。

藤岡 ありがとうございます。この図鑑の構成上の最大の売りはここです。田畠さん

担当部分の最後に掲載された図（7ページ上に転載）で、古琵琶湖の変遷と、どの古

琵琶湖の時代にどの種が分化したかを見て、いろいろ考えてもらえたと思います。

タネを明かしますと、図鑑の第一章の構成をこのようにしようと思ったのは、雑談

からなんですよ。僕は現役の研究員だった頃、昼ご飯を地学の研究室で食べていていた

のです。そこで、林さんたちの研究内容を聞いていたことが、図鑑に入れようと思った

きっかけです。

田畠 これまでに琵琶湖の固有種、

例えばポンモロコ、イサザ、ビワマス、ア

ブライガイ、イワトコナマズなどは、すべ

て現在の琵琶湖に適応したかたちをしてい

るので、現在の琵琶湖の大部分にあたる北

湖が形成された40万年前以降に、その環境へ適応して新しい種になつたのだろうと考

えられていました。

ちのすむ琵琶湖です。琵琶湖博物館学芸員の里口保文さんの「琵琶湖の成り立ち」、同じく林章馬さんの「琵琶湖地域の気候の変化」、藤岡さんの「琵琶湖水系のさまざまな環境」、川瀬さんの「琵琶湖水系の魚類の分類」、そして僕自身が書いた「琵

琶湖産魚類の起源とその分布の特徴」と5節あるのですが、これらは全部がつながつていてるともいえます。

僕は進化や種分化について研究しているので、論文を書くために必要ですし、琵琶

湖博物館で一緒に仕事をしているので知識があつたのですが、魚だけやっていて書かれた図鑑だと載らない情報だと思います。それ

が、一冊の中で読めるというのはすごいな

と思います。

藤岡 ありがとうございます。この図鑑の構成上の最大の売りはここです。田畠さん

担当部分の最後に掲載された図（7ページ上に転載）で、古琵琶湖の変遷と、どの古

琵琶湖の時代にどの種が分化したかを見て、いろいろ考えてもらえたと思います。

タネを明かしますと、図鑑の第一章の構成をこのようにしようと思ったのは、雑談

からなんですよ。僕は現役の研究員だった頃、昼ご飯を地学の研究室で食べていていた

のです。そこで、林さんたちの研究内容を聞いていたことが、図鑑に入れようと思った

きっかけです。

田畠 これまでに琵琶湖の固有種、

例えばポンモロコ、イサザ、ビワマス、ア

ブライガイ、イワトコナマズなどは、すべ

て現在の琵琶湖に適応したかたちをしてい

るので、現在の琵琶湖の大部分にあたる北

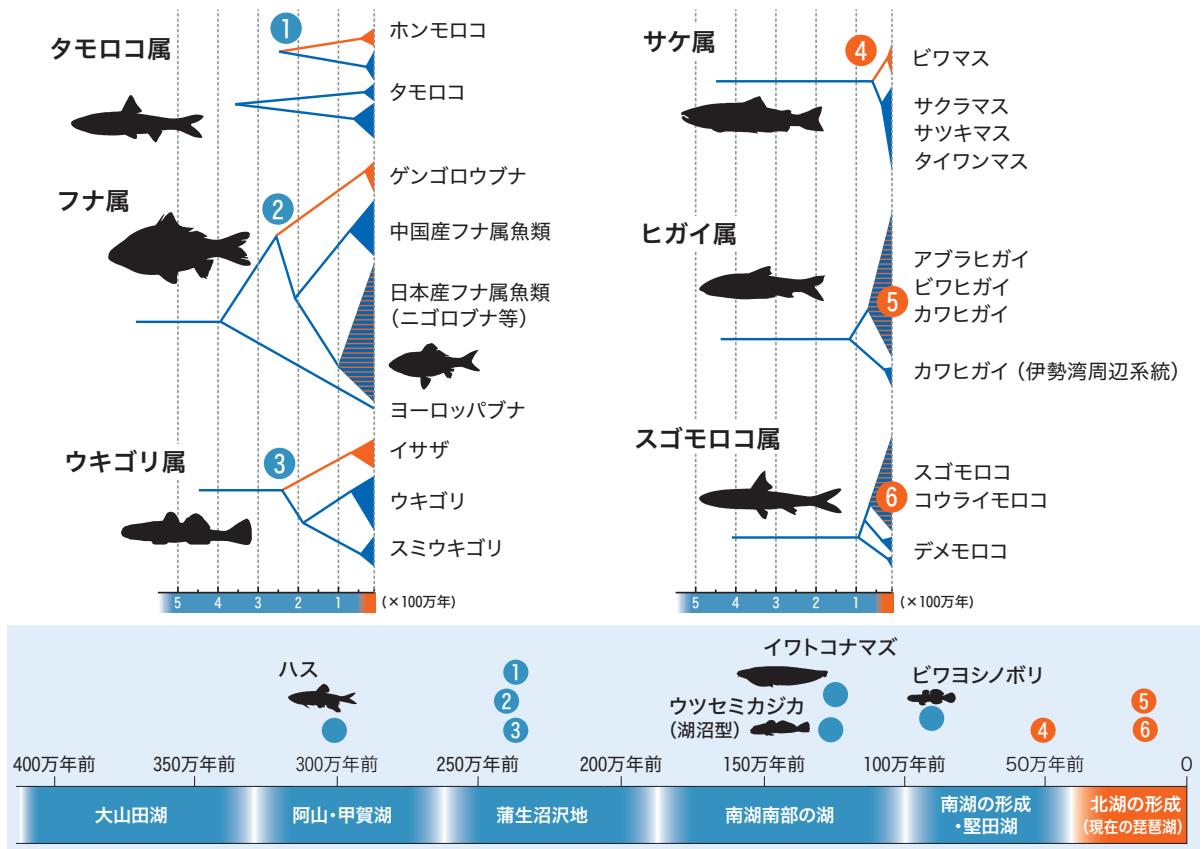
湖が形成された40万年前以降に、その環境へ適応して新しい種になつたのだろうと考

えられていました。

ちのすむ琵琶湖です。琵琶湖博物館学芸員の里口保文さんの「琵琶湖の成り立ち」、同じく林章馬さんの「琵琶湖地域の気候の変化」、藤岡さんの「琵琶湖水系のさまざまな環境」、川瀬さんの「琵琶湖水系の魚類の分類」、そして僕自身が書いた「

ところが、DNA測定で種の分岐時期を調べると、それ以前のいろいろな時代に系統としてはすでに分かれていたことがわかりました。僕自身がこの研究をしていて、

「へえ、すごい。こんなに分かれるんだ」と一番驚いた点です。  
——ホンモロコやゲンゴロウブナ、イサザが、約250万年前の蒲生沼澤地だった



琵琶湖固有種の最近縁種からの推定分岐年代 (Tabata et al. 2016, Yamasaki et al. 2015)。Watanabe (2020) を一部改変。

——琵琶湖の場合、ちようど規模的にもよいのかもしれませんね。

時代に分岐しているのは意外ですよね。  
田畠 大げさに思われるかもしれませんのが、「進化とは何か」という問いにもつながる、琵琶湖の魚の裏に隠されている壮大な歴史を知つてもらえるものだらうと思います。

藤岡 林さん執筆の「琵琶湖地域の気候の変化」に、500万年にわたる琵琶湖地域の気温変化のグラフが掲載されています。川那部さんは、琵琶湖産のアユが全国で放流されている理由に繩張りを強く持つことをあげ、その理由を考察して、エサが少なくなった氷期を生き抜く過程で獲得された習性ではないかと推定なさいました。気候変化のグラフを見ると、約10万年前にものすごく気候が大きく変動しています。

今後は、ある魚がとても変わった生態をしていることがわかつた場合に、その種が別れた時期と、琵琶湖の地史や気候変動の影響などを具体的に当てはめて考察することができるわけです。これは非常に大きな変化だと思いますね。

——琵琶湖の場合は、ちようど規模的にもよいのかもしれませんね。

藤岡 この琵琶湖地域というのは、固有種が16種もいるし、それが古い時代から食料として、漁業の対象として湖岸に住む人々の暮らしを支え、特有の食文化も生まれました。そのように、一つの地域でコンパクトにいろいろな物語が成立しているので語りやすい、モデルとしやすいという点が、とても大きな特徴だと思います。

田畠 人々の暮らしとの関わりの話が出ましたが、僕自身が小中学生ぐらいまでは、魚の研究者ではなく、歴史の研究者になりました。そのように、一つの地域でコンパクトにいろいろな物語が成立しているので語りやすい、モデルとしやすいという点が、魚と食文化」に書かれた魚を獲るために漁法や伝統食も読んでいておもしろかったで

## 魚たちの現状も読み取つてもらいたい

——人と魚の関係というと、絶滅危惧種や外来種の問題もありますが。

**藤岡** この図鑑に掲載された魚種の半分以上は、残念ながら滋賀県レッドデータブック<sup>※3</sup>にも載っています。最近、特にタナゴ類などの在来の魚が少し増えている傾向があるので、この状態が続き、駆除によって減つてはきている外来魚のブラックバス（オオクチバス）とブルーギルが、将来的には珍しい魚ぐらいになればと願っています。

**田畠** この図鑑には、滋賀県では絶滅種とされているイタセンバラやニッポンバラタナゴも載っています。まだ絶滅宣言はされていませんが、ほぼ絶滅したであろうアユモドキも。かつては琵琶湖にいっぱいいたのに、周辺に追いやられてしまった魚もいます。

例えばワタカは、解説を担当いただいた根本守仁さん（滋賀県水産試験場）もお書きのように、標識放流調査を行ったところ、採捕されたワタカは全部、放流魚だったという残念な結果でした。僕が遺伝子を解析した研究でも、ワタカは遺伝的多様性がゼロなんです。つまり獲れたすべての魚が放流由来であることを示唆する結果でした。こうしたそれぞれの魚が置かれた状況についても書いているのが、この図鑑のよい点でもあります。

**川瀬** 僕が担当したヤリタナゴもキャラッチコピーに「琵琶湖を追われ扇状地に残るボテジャコ」とあるように、現状の分布だけを見ると、扇状地を流れる川にいる魚というイメージになってしまいますが、海外の博物館に保存している琵琶湖産魚類の標本や1960年代のタナゴ類調査の記録

ですね。これらが一気に読める図鑑は、あまりないのではないかと思います。

——3人のうち、どなただったかは忘れましたが、印刷に回った頃にもう次の改訂版の話をなさっていましたね。

**田畠** この図鑑では、スナヤツメは「北方種」と「南方種」をまとめて書いています。が、水産研究・教育機構水産大学校の酒井治己名譽教授らが遺伝学的・形態学的再検討を行い、それぞれ「キタスナヤツメ」と「ミナミスナヤツメ」が新標準和名となりました。つい先日（12月6日）、日本魚類学会が発行する国際学術誌「Ichthyological Research」にオンライン掲載されたばかりの情報です。

**川瀬** 改訂版では更新していかないといけないですね。

**藤岡** 琵琶湖の魚の種類も、今後こうした検討によって少しずつ増えていくものと考えられます。

**田畠** 国のレッドリストや県のレッドデータのそれぞれのランクも掲載していますが、これも種類によつては変更されていきます。

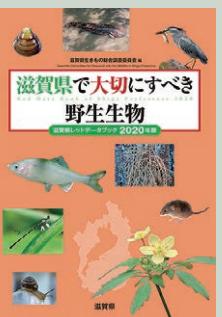
**川瀬** やはりではなく、今後もわりと頻繁に改訂版をつくることになりそうです。

**藤岡** ようやく現代に使えるベースとなる図鑑ができたというイメージだと思います。

——11月17日に琵琶湖博物館で開催された「びわ博フェス」での、藤岡さんによる講

### ※3 滋賀県レッドデータブック

ブックとは、生息地の調査により絶滅が危惧される野生動植物を選定して、その現状などをまとめた報告書。滋賀県では、おおむね5年ごとに刊行している。



滋賀県で大切にすべき野生生物  
—滋賀県レッドデータブック 2020年版  
滋賀県生きもの総合調査委員会編

演「新たな図鑑でわかったこと」では、会場の子どもたちにも熱気がありました。

**田畠** 壇上から「琵琶湖の固有種は何種いると思いますか?」と質問したら、ちゃんと答えてくれたので、すごいなと思いました。

**川瀬** あの子たち、この図鑑を持っていましたね。

**田畠** 琵琶湖博物館では学芸員が交代で質問コーナーに座っているのですが、僕が担当の時に、この図鑑を持った小学生が「サンインしてください」と言って、来てくれたこともあります。

**川瀬** 小学校からこの図鑑を読んで育つていつたら、僕らとは比べものにならない知識を身につけた大人になるんじゃないかなと思います。

**藤岡** 「びわ博フェス」の講演でも言つたことですが、この図鑑を手にとつた子どもたちが成長して、琵琶湖の周辺で、琵琶湖の生き物の生態を調べたり、魚やその生息域を保全する活動にたずさわってくれたらと思います。将来に期待ですね。

——本日はお忙しいところ興味深いお話をありがとうございました。

(2024-12-10)

# 『有明の月 ガラシヤの双刀』

おとくに  
乙訓戦国つつい 在原 叶

## ガラシヤと二人の家臣を描く

明智光秀の娘、細川忠興の妻と  
して数奇な運命をたどった玉子  
(ガラシヤ)と、二人の忠臣、河北  
無世と小笠原少斎の物語を昨年  
10月に出版した。

あまり知られていない二人を多く  
の方々に知っていただきたくて

京都府長岡京市の公式武将隊「京都・長岡京おもてなし武将隊」  
で玉子役を務める在原叶さ  
んが、イベントで演じた脚本をも  
とに、史実とフィクションを交えた  
ライトノベルとして書き下ろした。  
巻末では、ゆかりの地(京都府長  
岡市、綾部市、福知山市)の協力  
を得て、各市の関連スポットを力  
率で紹介。長岡京市の観光案内  
所などにも本を置いてもらつた。

## プロフィール

乙訓戦国つつい 京都府長岡京市の公式武将隊「京都・長岡京おもてなし武将隊」  
として、明智光秀や細川ガラシヤらが活躍する  
演武などを通じて当地の魅力を発信。ほかに、綾部・福知山など京都  
府内各市・福井・愛知・岐阜・滋賀(ひこね武将隊)・兵庫でも活動。  
在原叶 タレント活動を経て「乙訓戦国つつい」入団。おもに「京都  
都・長岡京おもてなし武将隊つつい」で細川玉子(ガラシヤ)役を  
務める。岐阜・関ヶ原PRタレントスタッフ、明智継承会特別会員。

## 直売とオンライン販売で

おもな販売ルートはイベントでの直売。多くのファンに囲まれ、  
サインを求める声に応じながら御城印などとともに手渡している。

「みなさんと直接ふれあえるひとときを大切にしていきたいです」  
遠方で来られない人のためには、

アマゾンなどのネット書店で注文に応じたオンデマンド販売を実施。  
「誓いを守り通した3人の姿に感動」「不覚にも泣いてしまった」と  
といった五つ星レビューが並ぶ。  
「初めて書いた小説をこのように評価いただけて、本当にありがとうございます。『有明の月』の裏側として、実は続編を書き始めていますので、気長にお待ちくださいね」  
作中の玉子のようにほほ笑んだ。

出陣情報や販売などの情報は、  
X、Facebookをご覧ください



立ける感動作と評判の  
戦国ライトノベル。  
2200円(税込)



左から、小笠原少斎、松井康之、細川藤孝、細川玉子(ガラシヤ)、河北無世、  
明智光秀、明智光慶



BOOKS  
図書館巡回展

わたしのまちの自費出版



栗東市立図書館での展示風景

県内の図書館で、滋賀県ゆかりの自費出版物を展示します。

あわせて、第27回までの「日本自費出版文化賞」（主管：NPO法人日本自費出版ネットワーク）受賞・入選作品もご覧いただけます。

※手にとってお読みいただけますが、貸し出しは館の所蔵図書のみとなります。

**1月30日(木)～2月24日(月)**

会場●草津市立図書館 [本館]

開館時間：10:00～18:00

休館日：火曜日・2/23(日)

**2月27日(木)～3月25日(火)**

会場●南草津図書館 [南館]

開館時間：10:00～20:00

休館日：月曜日・3/20(木)

絵本『聴導犬ポッキー いつもいっしょ』  
さかいゆきよ原画展

**2月2日(日)～23日(日)**

会場●栗東市立図書館 [本館]

手話通訳者で手話関係の本などのイラストを手がける酒井幸代さんが絵を担当した、聴覚障がい者の五十嵐恵子さんの聴導犬との実話絵本の原画展。



開館時間：10:00～18:00(土・日17:00)

2月23日(日) 14:00～ 栗東市内在住の小学生以上が対象の講演会も開催。

お問い合わせ先：TEL 077 (553) 5700

企画展  
おくにゅう 奥丹生のくらしと人々

**1月25日(土)～3月9日(日)**

長浜城歴史博物館

現在廃村となつた奥丹生地域（長浜市余呉町）では、山とともに生活する人々がいました。

この地域でつくられた木籠（茶わん祭りの館蔵）文化にも触れながら、かつての人々のくらしを振り返ります。

入館料：一般410円、小中学生200円

休館日：月曜日（祝日の場合は開館し、翌平日休館）

お問い合わせ先：TEL 0749-63-4611

企画展

**Real 甲賀忍者**

—くすりを活かす知恵—

**開催中～9月28日(日)**

甲賀市くすり学習館



甲賀は薬草の宝庫で、なかでも甲賀忍者は薬に精通しており、その知識を活かして敵を倒す薬や忍者の携帯食を作り、火薬の製作にと応用していました。

本展では、薬草など身近な自然を取り入れ、いかに忍術に活かしていくかなど忍者の知恵を紹介し、今日の甲賀の薬業につながる姿を探ります。

入館料：無料

休館日：月曜日（祝日の場合は翌日）

お問い合わせ先：TEL 0748 (88) 8110

三橋節子没後50年回顧展

—野草から家族への想いを描いて—

開催中～5月25日(日)

長等創作展示館・三橋節子美術館



三橋節子  
『冬の花』  
1972年

昭和50年（1975）に35歳で夭折した大津市長等ゆかりの日本画家「三橋節子」。令和7年（2025）に没後50年を迎えます。改めてその画業を振り返り、節子の人生と芸術、絵に込められた想いをたどります。

入館料：大人330円、高大生240円、小中生160円

休館日：月曜日（祝日の場合は開館し、翌平日休館）

お問い合わせ先：TEL 077 (523) 5101

第36回企画展示

**戦時下の滋賀県民とスポーツ**

**開催中～6月22日(日)**

滋賀県平和祈念館

太平洋戦争が始まると、日本伝統の武道が奨励される一方で、スポーツの全国大会などには規制が強まり、さらには食糧増産のために運動場が畑に代わってゆきました。



剣道用の籠手

滋賀県民とスポーツのかかわりについて、昭和初期から昭和20年までの戦時下を中心に、体験談や関連資料などで紹介します。

入館料：無料

休館日：月・火曜日（祝日にあたる場合は開館）

■学芸員による企画展示説明会

**2月1日(土) 13:00～(約1時間)**

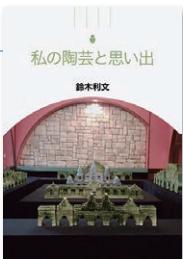
お問い合わせ先：TEL 0749 (46) 0300

## 私の陶芸と思い出

鈴木利文 著

A5判並製本 総120頁 非売品  
問合先 湖南省岡出1-5-20(著者)

25年にわたる趣味の陶芸作品をカラー掲載し、歌謡曲からクラシックまで青春時代以降の音楽体験や、好きな小説、映画、花、和菓子などの理由と思い出などを綴った。(2024.5.15刊)



やまの里 むくがわ風土記

## やまの里 むくがわ風土記

井上四郎太夫 著

A4判並製本 総224頁 非売品

問合先 高島市今津町桜川240(著者)

福井との県境の山村・棕川での「宮事」・「寺事」と呼ぶさまざまな年中行事と、稻作と炭焼きなどによるほぼ自給自足に近い暮らしのようすを紹介。(2024.9.5刊)



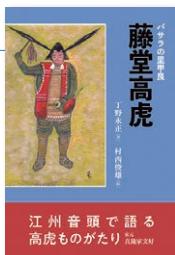
## バサラの里甲良 藤堂高虎

丁野永正 著

四六判上製本 総416頁 頒価1500円

問合先 東近江市建部瓦屋寺町134-25(著者)

戦国の世に犬上郡藤堂村に生まれ、一国一城の大名に出世、戦場で活躍するとともに城づくりの名人としても名を残した藤堂高虎の生涯を小説化。(2024.10.1刊)



## 父の羽織

植木誠健 著

B6判並製本 総232頁 非売品

問合先 守山市吉身三丁目9-12(著者)

昭和10年、京都生まれの著者が、西陣織の糸織や染の職人だった父と鮪ずしを作ってくれた母、戦艦と潜水艦の乗組員として南洋で戦死した2人の兄などを回想。(2024.11.27刊)

## モニカ 聖なる夜の物語

作 たけやまかずこ／絵 平野裕江

B5判中綴じ 総16頁 非売品  
土の中に住んでいるモグラのモニカが、木の根っこを伝わって聞こえてくる音をたどって、旅に出た。地上に出た先に見たものは? (2024.12.19刊)



## 新井白石の青春と生涯

—だれも知らない「白石物語」—

坂井 昭 編著

A4判並製本 総80頁 非売品

問合先 千葉県君津市君津台1-3-3(編著者)

新井家歴代当主と関係寺院を紹介、謎の多い白石の事績を最新研究に基づき解説。没後300年記念事業として発刊。(2024.7.31刊)



## 乗り鉄ときどき城巡り 卷之九 四国編(後)

佐渡 滋 著

A4判並製本 総110頁 非売品

問合先 大阪府吹田市五月が丘東6-B503(著者)

城好きの著者が鉄道に揺られて各地の城跡を巡る写真紀行。四国4県の14篇に加え、城郭研究家・中井均氏による書評を収録。(2024.9.20刊)

## 真宗木辺派滋賀教区に遺る戦争の記憶

木田昌志 編／真宗木辺派光照寺 発行

B5判並製本 総44頁 非売品

問合先 近江八幡市江頭町808 光照寺(編著者)

野洲市の錦織寺を本山とする真宗木辺派の滋賀教区寺院に呼びかけ、住職や門信徒から寄せられた日中戦争と太平洋戦争に関わる記録や写真を収録。(2024.10.29刊)



## 現代語訳 往生要集繪相の略解

菅原教応 著／菅原義生 訳

A5判並製本 総196頁 非売品

問合先 近江八幡市緑町3-739-10(訳者)

昭和27年(1952)に遍照寺(近江八幡市)の菅原教応住職が書いた「往生要集繪相(六道繪)」の解説を、孫にあたる訳者が現代語訳し、原文とともに収録。(2024.12.10刊)



## 文学作品展示即売会 文学フリマ京都9

入場  
無料

1月19日(日) 11:00 ~ 16:00

会場●京都市勧業館みやこめっせ

1F 第2展示場

サンライズ出版のブース番号【け-30】

文学フリマ大阪12のようす



## 自費出版年鑑2024

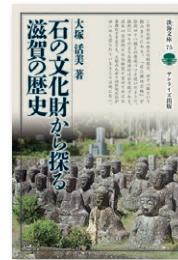
NPO法人日本自費出版ネットワーク 企画  
B5判並製本 総144頁 2420円(税込)

日本で唯一の自費出版に関する年鑑。第27回日本自費出版文化賞の大賞受賞インタビュー、受賞作の内容、受賞者のことば、選考理由などを紹介する。全応募作の書誌情報報を掲載。第28回募集要項を付す。

## 和算入門 江戸の算数ものがたり

松本匡代 著  
四六判並製本 総176頁 1650円(税込)

憧れのお光ちゃんに算数の入門書づくりを頼まれた勘定所の見習い役人・山口公明が、幕末江戸の人々のさまざまな問題を「和算」で解決する痛快人情劇。鶴亀算などのわかりやすい図解と、小学校で習わない漢字に振り仮名を付す。



## おうみ 淡海文庫75 石の文化財から探る滋賀の歴史

大塚活美 著  
B6判並製本 総220頁 1650円(税込)

滋賀県の湖東地域を中心に、道標、石灯籠、社号標、石鳥居、石碑、石仏の特徴と建立年代による推移を探り、中世において多数の石塔や石仏が造られた時代背景を考察。

## すみつぐ 愛すべき第二のふるさと走井

NPO法人くらすむ滋賀 編著  
A5判並製本 総44頁 2200円(税込)

栗東市南部に位置する中山間地域「走井」の林業家・宮城定右衛門氏の語りを中心に、歴史、文化、農林業の魅力とともに、社会や地域の課題にも目を向けながら地域を紹介。



## 里山の小径 こみち 野の花 水彩画集

中川善雄 画  
B5変形並製本 総68頁 2200円(税込)

路端で可憐に咲く一輪の花にも命がある——春の林でひそりと咲くシエンランに始まり、晩秋に熟すフユイチゴの赤い実まで、丁寧に描き続けた、水彩画65点を収録した画集。



## 発刊記念講演会 & 「七本館」試飲会

3月16日(日) 13:00 ~ 15:00



賤ヶ岳近くの富田酒造が作る銘酒「七本館」のラベルの文字は、のちに北大路魯山人と名乗った福田大観の手によって刻まれた扁額からとられている。12代当主富田八郎と大観との交流を、舞台となった地で著者が解説。あわせて「七本館」の試飲もお楽しみいただけます。

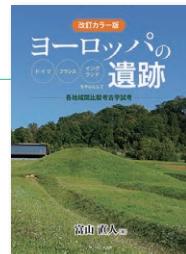
- 講師：畠中英二（京都市立芸術大学教授）
- 会場：きのもと交遊館  
(長浜市木之本町木之本1118 JR木ノ本駅下車、徒歩10分)
- 料金：淡海文化を育てる会 会員：無料／一般：500円(資料代)
- 申込み・問合せ：淡海文化を育てる会（サンライズ出版内）  
TEL 0749 (22) 0627 FAX 0749 (23) 7720  
Email : info@sunrise-pub.co.jp

## 表紙写真 ピワマスの稚魚（愛知川上流）藤岡康弘氏撮影

**編集後記** 今回の特集取材で琵琶湖博物館にうかがったのは昨年12月10日だったので、水族展示室でヒウオ（氷魚）と呼ばれるアユの仔魚が季節限定の展示中。照明でキラキラ光りながら泳ぐ姿を見ることが出来ました。11月1日から下流域水槽に入っていたピワマスの赤い婚姻色の出た成魚は、12月7日に最後の1尾が死んでしまっており、残念ながら見られず。11月だと婚姻色の出たカネヒラのオスもバエるそうです。  
（+）

## 改訂カラー版 ヨーロッパの遺跡 ドイツ・フランス・イングランドを中心として

富山直人 著  
A5判並製本 総374頁 3850円(税込)  
アマゾン・楽天ブックスなど PODで発売中  
海外の遺跡について簡単に学べるガイドブックとして高評を得た初版を改訂し、150ページ以上をカラー化して刊行。



Duet の定期購読をご希望の方は、下記までお申し込みください。

〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町655-1  
サンライズ出版株式会社 Duet 編集部  
TEL (0749) 22-0627 FAX (0749) 23-7720  
(振替) 01080-9-61946

インターネットで Duet がお楽しみいただけます。

<http://www.sunrise-pub.co.jp/>

お申込先